資源管理型漁業推進総合対策事業調査

5．沿岸特定資源：ミズダコ

（抄　録）

藤　川　義　一　・　高　梨　勝　美

は　じ　め　に

風間浦村地区でのミズダコの管理方策を検討するため、同地区におけるミズダコの漁業実態、漁獲動向と分布、移動、成熟について調査した。

材 料 と 方 法

漁獲量と漁獲金額及び平均単価

平成７年11月から平成９年12月に下風呂漁協、易国間漁協、蛇浦漁協に水揚げされたミズダコとマダコを月別漁獲量、漁獲金額及び平均単価を調べた。

ミズダコの月別体重組成

平成７年11月から平成９年12月に下風呂漁協、易国間漁協、蛇浦漁協に水揚げされたミズダコについて各月60個体の体重を測定するとともに、雌雄を判別した。

ミズダコの漁獲尾数

平成７年11月から平成９年12月に下風呂漁協、易国間漁協、蛇浦漁協に水揚げされたミズダコの月別体重組成を基に、月別漁獲量から漁獲尾数を求めた。

標識放流試験

平成８年２月から平成９年12月にかけて下風呂漁協、易国間漁協、蛇浦漁協に水揚げされミズダコの標識放流を行った。

標 本 船 調 査

平成７年11月から平成９年12月にかけて下風呂漁協、易国間漁協、蛇浦漁協で各々２隻の標本船を選定し、操業日誌の記載を依頼した。

分　布　調　査

易国間地先において平成８年から平成10年１月にかけて水深10、20、30、40ｍの各水深別に篭を設置し、ミズダコ、マダコを採集した。

成熟状況調査

平成８年11月から平成９年５月に易国間地先において漁獲されたミズダコの成熟状況を調べた。

結　　果

漁獲量と漁獲金額及び平均単価

ミズダコは銘柄では銘柄「並（並ダコ）」の漁獲量が最も多く、次いで「小（小ダコ）」「オス大（水ダコ）」「メス大（真ダコ）」の順になっていた。並ダコは漁期間通じて漁獲されるが、特に11月から12月に多く、また、小ダコ、オス大、メス大は、12月から１月にかけて多く漁獲されていた。漁獲量全体では、11月から２月にかけて多かった。

マダコの漁獲量は平成８年11月から平成９年５月の漁期では減少したものの、平成９年11月から再び増加した。漁獲量の多い月は11月から12月であった。

ミズダコの月別体重組成

漁獲されたミズダコの体重組成は、周年体重３～６kg付近にモードを有する単峰形を示していた。体重15kg以上の大型な個体は、11月から１月にかけて多く漁獲されていた。

ミズダコの漁獲尾数

ミズダコの漁獲尾数は、総じて小ダコ、並ダコが多く、多い月では両者合わせて１漁協で5,500尾以上の漁獲があった。オス大、メス大は、最も多い月でも下風呂における平成８年12月の470個体であり、少なかった。

標識放流試験

平成９年12月までに放流数は合計1,572個体、再捕個体数は合計87個体であり、全海域の平均再捕率は5.5％であった。

再捕個体数に占める放流海域で再捕された個体の割合は、下風呂66％、易国間61％、蛇浦55％であり、平均約61％の個体が放流海域で再捕された。放流後約１年後に、放流海域で再捕された個体もあった。放流海域から外へ移動した個体は、１個体を除く全てが津軽海峡内の下北半島沿岸及び北海道渡島半島沿岸で再捕されていた。

ミズダコは放流から１年以内で大きなものでは10kg以上の成長が認められた。

標本船調査

下風呂では樽流し、易国間、蛇浦ではタコ篭漁法によって操業されており、各標本船は少ない月で数日、多い月で20日程度の操業を行っていた。

下風呂での樽流し漁法におけるＣＰＵＥは、平成８年12月から平成９年５月漁期では高く、多い月で約29個体／日であった。

易国間漁協での篭漁業におけるＣＰＵＥは、平成７年11月から平成８年５月漁期では、小ダコの漁

獲割合が多かったものの、その翌年の漁期では、並ダコの漁獲割合が高かった。また、蛇浦漁協では、平成８年11月から平成９年５月漁期ではその前年の漁期に比べ操業日数が多かった。

分　布　調　査

調査を通じて、ミズダコは10月から５月に比較的多く採集されたが、８、９月には採集されなかった。マダコは７月から２月まで採集され、９月に最も多く採集された。

成　熟　調　査

成熟は11月から３月に認められ、尻屋、佐井村周辺海域に生息するミズダコの調査結果と同じ時期に認められた。